

熊谷市立江南文化財センター テーマ展

須藤開邦コレクション展

会期：令和7年7月1日（火）～12月26日（金）

会場：熊谷市立江南文化財センター ホール展示ケース



1 はじめに

今回の展示は、熊谷市内玉作の旧家須藤家当主で、政治家・好古家の開邦（さきくに）が収集した資料を、紹介します。須藤家は、下野国那須氏の支族須藤氏の末裔と伝えられ、江戸時代には、玉作の名主を代々勤め、主に兵左衛門を名乗っていました。

2 須藤開邦

開邦は、安政元年（1854）須藤家に生まれ、幼少から学問を好み、地元の漢学塾で学びました。明治7年（1874）には玉作村の戸長を勤め、明治9年（1876）には第七大区の学区取締役に就き、明治11年（1878）に熊谷講習学校財務主幹となっています。

明治10年（1877）11月には、市内青山の根岸武香（1839-1902）とともに吉見町の黒岩横穴墓群を調査しています。日本で最初の学術的発掘調査は、同年9月～12月にエドワード・S・モース博士が調査した大森貝塚であり、須藤・根岸の調査が、当時の日本において先進的な取組であったことがうかがえます。

明治11年（1878）には、埼玉県初の自由民権結社「七名社」に参加し、明治17年（1884）には大里郡選出県会議員に当選し、明治20年（1887）まで奉職しました。大正2年（1913）には、市内相上・吉見神社の花崗岩製の大鳥居を寄進しています。

晩年には、俗塵を避けて古書を友とし、芳水または魚夫と号し、書画、骨董に親しみました。大正5年（1916）には、地域の見聞録『桐窓夜話』を著しています。

青山の根岸家とは縁戚関係にあり、武香の影響で、当時の好古家のネットワークにも参加し、今回展示している考古資料を収集したり、親交のあった熊谷町の俳人で仏師の四分一葉々（1863-1940）が彫った二宮金次郎像や、頓阿（1289-1372）作の柿本人麻呂像を入手しています。

昭和8年（1933）、80歳で没し、翌年、孫の乙丸により開邦の業績が刻まれた「須藤開邦翁碑陰」墓碑が建てられています。



3 縄文時代の石器

尖頭器・石匙

尖頭器は、縄文時代草創期に、槍の穂先として狩猟に使われた石器です。北海道産の黒曜石と東北産の頁岩製の石器があります。出土地と思われるラベルが付けられている石器があり、それには「根室国」「十勝国」「樺太」「北見国」「釧路国」「石狩国」「天塩国」「後志国」「胆振国」と記されています。

石匙は、縄文時代草創期から使用されたもので、万能ナイフとして動物の解体や調理、木や骨の加工などの作業に用いられたと考えられています。尖頭器同様に、黒曜石と頁岩製の石器があり、北海道・東北地方産石材で製作されたものと推測されます。



石棒（2点）

石棒は、子孫繁栄を祈願する祭祀に関連した呪術的な道具として使用されたと考えられています。縄文時代中期から後期にかけて盛行し、弥生時代前期まで使用される石器です。1点目は、長さ70cmの緑泥石片岩製で、両端部にこぶ状のふくらみがある両頭石棒です。2点目は、長さ75cmの点紋緑泥石片岩製で、片側にこぶ状のふくらみがあがる片頭石棒です。

両石棒とも大型品で、利根川上流の鐺川・雄川流域の転石を利用し製作されたものと推測されます。

石皿（1点）・磨石（1点）

縄文時代の木の実などを磨りつぶすための調理具で、磨石とセットで使われます。下面にはこぶ状の脚が3つ付けられており、据付石皿または固定式石皿と呼ばれています。安山岩製で、利根川上流域で転石を利用して製作されたものと推測されます。

磨製石斧・打製石斧

縄文時代中期の、木の伐採や加工に使われた磨製石斧、土掘り具として使われた打製石斧で、磨製石斧1点に、秋田県北磯村相川発見（現・男鹿市）のラベルが貼られています。



石鏃

縄文時代早期から後期にかけて、矢の先端に付けて弓で射った、小型の動物を狩るために用いられた石器です。黒曜石・チャートの石材で製作されています。出土地は不明です。

4 古墳時代

土師器 坏（2点）

口縁部がS字状をした比企型坏で、埼玉の比企地方で作られました。6世紀から7世紀頃にかけて多く作られたもので、表面は赤彩されています。出土地は不明です。

須恵器（3点）

はそう・長頸瓶（ちょうけいへい）・平瓶（へいへい）は、古墳時代後期の水や酒等の液体を扱うために使われた器です。出土地は不明ですが、古墳の副葬品の可能性があります。



装飾品

古墳石室から出土したと推測される副葬品で、金銅製耳環（13点）、管玉（7点）、勾玉（12点）、水晶製切子玉（8点）白玉、ガラス玉があります。出土地は不明です。



5 中世

銅鏡（3点）

「八稜鏡」：中国唐代の鏡。中央に鳥や草花の文様が配されています。

「八花鏡」：中国唐代の鏡。中央に花や龍や鳥を配する例が多いが、腐食のため不明です。

「菊散双鳥鏡」：和鏡。中央に菊の花と雀が配されています。

これらの鏡は、経塚や墓に埋葬されて発見される例が多く、本資料も腐食の状態から、伝世品ではなく、出土地は不明ですが、不時の出土品と推測されます。



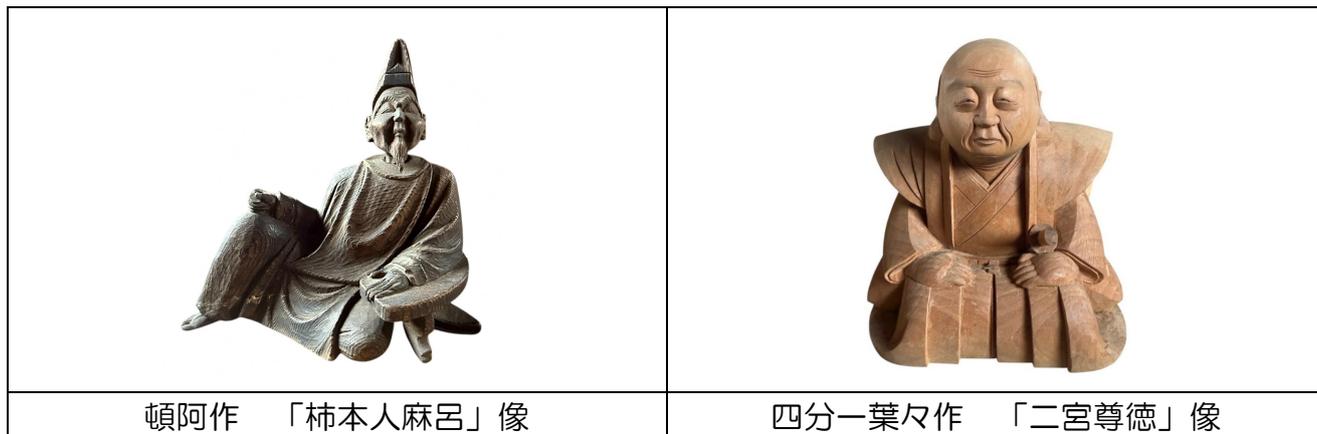
木像「柿本人麻呂」像

鎌倉時代の僧・歌人頓阿（1289-1352）作の「柿本人麻呂」像で、四分一葉々から開邦に譲られたものです。頓阿が、住吉大社に百体または三百体奉納したと伝えられる像の一つと思われます。同様の像は、京都府知恩院、福島県白河市鹿島神社に伝わっています。

6 近世・近代

木像「二宮尊徳翁」像

熊谷町の仏師で俳人の四分一葉々が製作した「二宮尊徳翁」像で、木彫百體會を企て、熊谷の桜堤の枯枝を譲り受けて彫ったものです。葉々から開邦への譲り状が残っており、後日、「柿本人麻呂」像を持参する旨の記載もあり、両者の交友関係を示す資料です。



火山灰（2点）

浅間山の噴火により降下した火山灰を、ビンに詰めたものです。

1点目は、「天明降砂」のラベルが付けられており、天明3年（1783）8月4・5日に大噴火した際の火山灰です。関東中部で、降灰のため昼も暗夜のようになり、火砕流・岩屑なだれが発生し、吾妻川を塞いだ後決壊し、多量の水が利根川に流出し下流の村々を襲いました。

2点目は、「大正八年三月十四日朝降砂」のラベルが付けられており、大正8年（1919）浅間山の釜山火口が噴火した際の火山灰です。

両者とも、浅間山から90km程離れた熊谷地域で採取された火山灰として貴重な資料です。



令和7年7月1日発行
編集・発行：熊谷市立江南文化財センター
（熊谷市教育委員会 社会教育課 文化財保護係）



熊谷デジタルミュージアム